「千一問」とイスラムの正統性

—ファトワをめぐる問答を中心に

坪井 祐司

はじめに

本論文は、『カラム』誌のコラム「千一問」を題材として、同誌のなかでファトワがどのようにとらえられていたのかについて考察する。

ファトワとは、法学者(ウラマー)によるイスラム教に関する事項についての法的判断である。多くは、信徒からの質問に対する回答という形式を取る。ファトワを出すことが出来る公的な役職者は、ムフティと呼ばれる。ムフティにはさまざまなレベルがあり、そこで示されるファトワにもさまざまなものがあった[大塚など編 2002: 829, 987-988]。

『カラム』におけるコラム「千一問」は一問一答形式であり、読者からの質問に対して回答がなされる。形式のうえではファトワに類似しているといえる。実際、「千一問」に掲載された読者投稿の質問のなかには、「少しファトワ(説明)をお願いします」と書かれた例が見られる[*Qalam* 1969.10: 36]。回答者は、無記名であることが多く、アブー・アル=モフタル(Abu Al-Mokhtar)と記されている場合もあるが、この人物の詳細については不明である。このコラムに関しては、『カラム』の編集長であったエドルスなど、編集部に近い人物がときに仮名を使用して答えていると考えられる[坪井・山本編2016]。それでは、『カラム』の編集者たちは、ファトワをどのようにとらえていたのだろうか。

塩崎は、マレーシアにおけるファトワの特徴として、国家による管理がなされている点を指摘している。宗教当局がファトワを出す権限を独占し、公的なファトワに違反した場合は処罰されるという体制である。処罰の規定は近年になって制定されたものであるが、その背景には政府とウラマー(および彼らが支持する政治勢力)との間に激しい対立の歴史があった[塩崎2016]。『カラム』の時代は、そうした対立のなかで独立国家が築かれ、ファトワに代表されるイスラムの権

威が国家にとりこまれていく過程にあった。

『カラム』は政治色が強い雑誌であり、マラヤ、シンガポールなど各国の政府に対して野党的な立場で批判することも多かった。政府や公的な役職者によるファトワの正統性に対して、どのような意見を抱いていたのだろうか。そこで本論では、「千一問」においてファトワという語が登場する質疑応答を取り上げ、そこからうかがえる宗教的な正統性の確保のあり方について分析する。

本論は、以下の構成をとる。第一節では、ファトワ一般についての認識がうかがえる問答を取りあげる。第二節では、中東など、マラヤ外におけるファトワに関する議論を取りあげ、第三節では同時代のマラヤで出されたファトワに関する問答を取りあげ、結論では『カラム』におけるファトワとイスラムに関する正統性の認識について整理する。

1. ファトワとイスラム法解釈

ここから、「千一問」における質問と回答を取りあげる。なお、以下に引用する訳文は、これまでのディスカッションペーパーの試訳による。引用は、一部を省略した箇所がある。文中に登場する「ファトワ」という語には下線を付している。

まず、ファトワについての認識がうかがえる問答を紹介する。

Q.1

現在、一つ一つのイスラム教の問題に関してウラマーらの間に様々な対立が生じている様子を、私は常々見たり聞いたりしています。その理由は、この問題に関して両者の間に見解の相違があり、それぞれが見解を出しているからです。(中略) あるウラマーがイスラムの宗教上の事柄に関して、唯一ハディースとコーランに基づいたものではない、すなわちハディースとコーランに反する箇所があるファトワを出した場合、そのウラマーの権利は法的にどうなりますか。

A.1

対立(見解の相違)が生じる理由の大半は、ハディースまたはコーランの不明瞭な部分の意味を解釈する際に起きている。彼らは、あることについて説明が不明瞭なコーランまたはハディースにもとづいてそれぞれの見解を出している。通常、もしコーランの中に明確でない部分があった場合、ハディースの中に説明があるのだが、もしハディースの中にも説明がなければ、教友らのイジュマーからそれを得ることができない。そしてイバーダートの事項においてはキヤースが存在しない。キヤースが唯一許されるのは預言者ムハンマドの時代に生じたことがない事象に対してである。よってそれに対し法的判断を下す際は、昔の預言者ムハンマドの時代状況に鑑みて、その状況にキヤースを加えなければならないのだ。各々の法的判断はコーランとハディースにもとづかなければならず、もしコーランとハディースに反する法的判断を下したならば、それは罪である。従うべきはコーランとハディースにもとづいた法的判断である。なぜなら、その中にこそ確然たる法的判断が記されているからだ。

[*Qalam* 1958.10: 30]。

質問者は、当時のウラマーによって出された複数のファトワが相克するケースが見られたことを指摘している。回答では、ウラマーがファトワを出す際の一般的なプロセスとして、まずコーラン、ハディースを参照すること、そこに明記されていなければ多数によるイジュマー(合意)を参照し、それも存在しなければキヤース(推定)を行うことを説明し、コーランやハディースに反するファトワは罪であると述べている。これは、イスラムにおける法的判断にもとになる法源についての一般的な認識と考えられる。

Q.2

ウラマーらにタクリードすることは許されますか。

A.2

上記の事柄について議論しやすいように、タクリードに関連する問題を論じる前にまずはイジュティハード、イッティバー、そしてタクリードの意味を知ることが望ましいだろう。

イッティバーの元々の意味は従うということで、ウラマーらによって使われる意味あるいは用語としては、いかなる命令、禁制、そしてアッラーの使徒とその教友らの行いにも従うということである。上記のように従う人々はムッタビーと呼ばれる。このムッタビー

はタクリードをしないことから、時々ムジュタヒドと呼ばれることもある。ムッタビーは、アラビア語を解する必要はない。なぜならそれは、キヤースを以て何かの法を深く理解する、あるいは大衆にファトワを出すためではなく、自分自身が実践するための一般的な法を知るために必要なだけに過ぎないからだ。

[*Qalam* 1966.6: 9-10]

質問では、タクリードの是非が問われた。それに対して、回答者は、タクリードを「コーランあるいは預言者ムハンマドのハディースの中の説明がないまま、宗教の法に関して人の言葉や行為に従うこと」と定義して、それは禁じられていると主張する。そして、ファトワを出すウラマーのみならず、イジュティハード(宗教に関して専門家が解釈すること)ができる知識を持つイスラム教徒にとって、イジュティハードは義務であり、その他の人びとはイッティバーの義務があると結論づけた。ここには、イジュティハードを重視するイスラム改革思想の影響が見られる。

Q.3

ある時、ある者が宗教について論じ、そして相手が誰であろうと、例えばウラマーであろうと挑み、非難し、一般庶民のイスラム教徒たちの心中にウラマーに対する嫌悪をかきたて、そして彼らが宗教に背を向けるような結果をもたらした場合、その者をムナーフィクと呼ぶことは許されますか。ムナーフィクがどのような状況にあり、彼らがどのように活動しているのか、そして彼らに命じるべき法について、ご説明願います。

A.3

これに関して、まずは預言者ムハンマドの時代におけるムナーフィクの人々とその行動や振る舞いについて解説することが不可欠だろう。簡潔に言えば、ムナーフィクとは特定の目的を持ち、表面だけ繕った人のことを指す。利益がある、あるいは対抗することができないと分かった時、彼らはアッラーやその使徒ムハンマドの命令に従う、あるいは忠誠を誓うふりをする。しかしその陰で、彼らはイスラムを崩壊させることに努めている。

共産主義者と社会主義者は、当初無神論を大っぴらに唱えていたが、その大っぴらな手段ではイスラム教徒に対抗できないと分かると、彼らは自由を説くことで宗教を信じる人々を軽んじるようになった。この

間、彼らはムナーフィクとして働いていた。社会主義者は宗教に反しておらず、イスラム教もまた社会主義思想を教えていると公衆の前で主張するよう、彼らは命じられた。これらのムナーフィクたちは遠慮なくモスクに入り、アッラーに忠実で、宗教を愛していると訴えかける。そのためにモスクに入った際、彼らは大衆を騙すために「礼拝を行う」が、一旦モスクを出れば酒を飲む。

預言者ムハンマドの時代のムナーフィクと現代のムナーフィクとの違いは何だろうか。我々の理解では、両者に違いはない。ゆえに彼らが死んだら、イスラム教徒の中に彼らために葬儀の礼拝を捧げ、墓場へと付き添う者がいてはならないし、墓場に眠る彼らのために決して祈りを捧げてはならない。責任のあるウラマーが、こうした人々に対する明確なファトワを出すことを願いたい。 [Qalam 1961.10: 39-41]

ここでは、「ムナーフィク (偽善者)」¹⁾をめぐり、ムスリムの間の思想や見解の相違について問われている。同時代のムナーフィクとは、「共産主義者や社会主義者」のムスリムが想定されていると思われる。回答者は、ウラマーが彼らを否定するファトワを出すべきであると主張している。

イスラム法学における『カラム』の立場は、改革主義の影響を受けていたが、急進的なものではなかった。ファトワは、権威あるウラマーが出すイスラムにおける法的判断として、正統性を認めていた。一方で、複数のウラマーから異なったファトワが出されており、その内容をめぐって議論の余地があったこともうかがえる。

2. ファトワの系譜性 ——ムハンマドから現代の中東まで

参照されたファトワは、同時代に出されたものばかりでなく、過去に出されたものもあった。ムハンマドや、歴代の著名なウラマーが残した発言がファトワとして言及される問答もみられた。

Q.4

私の知人の一人が、離婚せずに10年以上も妻とともに暮らしてきましたが、最近になり愚かさとなりて駆られて以下のように宣言して妻と離婚しました。

1) コーランでは、ムハンマドが信頼できない信徒に対して用いた。ただし、そうした人びとを不信仰者(カーフィル)とせず、ムナーフィクとすることでイスラム共同体の分裂を回避した [大塚など編 2002: 303-304]。

「俺はお前を三回のタラークを以て離婚する」と一度に宣言したのです。その後二人は共にそれを後悔し、復縁しようとなりました。カディは、たとえ妻が妊娠していようともその三回によって離婚は成立し、三回を一度に発した場合も成立する、という最終的な説明を行いました。そして、カディはより詳しく、「チナ・ブタ」の方法以外に二人がよりを戻し、再び共に暮らすことを可能にする方法はない、という説明を行いました。

貴殿に以下のことをご説明願いたいと思います。

1) 一度に宣言した回数によってタラークの回数は決まりますか。2) このチナ・ブタという方法は実際にイスラムにおいて許されることなのでしょうか。3) 三回目のタラークの後にチナ・ブタを通じて自分の妻を娶った人々は法的にどうなりますか。

A.4

歴史によれば使徒ムハンマドの時代、カリフ・アブー・バクルの時代とカリフ・ウマルの二年間の統治時代には、一度にタラークを三回あるいはそれ以上宣言しても、それは一回のタラークに過ぎないと見なされていた。しかしその後、その宣言を弄ぶ者が多かったため、サイディーナ・ウマルはそれを三回のタラークになるという判断を下したのだ。

そこで一つの疑問が生じる。使徒ムハンマドの時代に起こり、次いでカリフ・アブー・バクルとそれに続く人々によって受け継がれた法を、状況の変化を理由に変えても許されるのだろうか？サイディーナ・ウマルは後になってタラークを三回宣言するとそれは三回のタラークに数えられると判断を変えたが、それは人々がタラークを弄ばないように、そして他の人々に対する警告として示すためだった。これは彼のイジュティハードである。しかし理解している人々はサイディーナ・ウマルのイジュティハードに追従せず、彼らは預言者ムハンマドのファトワを実践したのである。よってサイディーナ・アリー・イブン・アビー・ターリブ、イブン・マスード、そしてイブン・アッパースは預言者ムハンマドが出したファトワの通りのファトワを出したのである。さらに数人の教友たち、そして多くのタービーンとターピアルタービーン[タービーンの弟子]のウラマーらがこのファトワに従った。

[Qalam 1958.5: 9-10, 38-39]

質問は、同時代のマラヤ社会における離婚、とくにタラークと呼ばれる男性からの宣言による離婚について扱っている。回答では歴史をさかのぼり、ムハンマドおよびその後の指導者たちの見解がファトワとし

て認識されている。三回の離婚宣言を一度に出せるのかという問題について、法的判断は変化したが、最終的にムハンマドのファトワが正統性を持つと認められたという内容となっている。

Q.5

スンナ派に認められた四大法学派のイマームたちの来歴の概要をご説明願います。

A.5

ハンバリー派の先駆者あるいは創始者はアル=イマーム・アフマド・ビン・ムハンマド・ビン・ハンバル・ビン・ヒラールである。彼の弟子には数多くの高名な人物があり、その中にはアル=イマーム・ブハーリーとムスリム(二人の高名なハディース伝承者)がいた。コーランとハディースの中から有効な文言を見出せなかった場合、彼は預言者ムハンマドの教友たちの出したファトワを固く守った。彼は四つの原則に基づきそのマズハブを編成した。第一の原則はコーランとハディースの文言から導き出すことであった。何らかの法を導き出す上での方がまず調べたのは、コーランとハディースの文言があるかないかであった。もしコーランとハディースの文言があれば、彼はその文言に従ってファトワを出した。

第二の原則は預言者の教友らのファトワであった。つまり何らかの問題において、その問題に関連する文言が見出せなかった場合、彼は教友らのファトワを探し出し、そして教友らの一人が出したファトワがあり、同時にそのファトワが他の教友らに反論されていなければ、教友が出したファトワに従ってその問題の法的判断を明確に行った。もしそのファトワに関し何人かの教友らの間で相違があることが判明した場合、彼は聖典とスンナ(コーランとハディース)により近い見解により類似している、あるいはより一致しているファトワを選んだ。 [Qalam 1967.9: 8-10]

この質問への回答では、四大法学派(マーリキー、ハンバリー、シャーフイー、ハナフィー)の創始者が紹介されている。ハンバリー派のイブン・ハンバルを紹介した回答のなかでは、彼の見解およびムハンマドの教友の見解があわせてファトワとして繰り返し言及されている。

Q.6(057-02)

聖なるメッカの地はワッハーブ派に属する一家が支配しています。その宗派は何ですか。その信条は何

ですか。その発祥地の名前は何ですか。またどのような由来でしょうか。

A.6

宗派はスンナ派である。すなわち、彼らはコーランとハディース、そして教友らのイジュマーの教えだけを規範としている。彼らの信条は、アッラーを他に神はなく、ムハンマドはコーランとハディースという方法を以てあらゆるアッラーの要求を伝えるアッラーの使徒である、というものである。彼らは宗教の道において2つの方法を規範としている。すなわち、イバーダートを行う時、彼らはコーランとハディース、そして教友らのイジュマーに基づき、単に行うよう命じられたことだけ実践する、という方法である。もし命令がなければ彼らはそれを行わない。また、行うよう命じられたことに対して追加あるいは削減するような大胆なことはしない。世俗の事柄に関する2つ目の規範は、禁止事項に則って行動するという方法である。彼らは禁止されていないことは何でも行うことを許している。例えば、たとえ食すことが好まれない物だったとしても、コーランとハディースにより禁じられていない物は何でも食すことを容認している。

発祥の地はナジュドである。ワッハーブ派という言葉は、アラブの国で迷信が蔓延している状況を受け、その教えを説いた人物の名称からきている。それは、アブドゥル・ラーマン・ビン・アブドゥル・ワッハーブである。彼は現ヒジャーズ王の曾祖父にあたる。現れたのはおよそ200年前である。コーランとハディースに基づくファトワを規範とした結果、彼らは攻撃にあったが、その思想が廃れることはなかった。この思想は、現在の人々からカウム・ムダとも呼ばれている。

[Qalam 1955.4: 39]

この回答においては、ワッハーブ派に関する説明として、コーランとハディースに基づくファトワを規範としたと書かれている。説明では、マラヤにおけるイスラム改革派であるカウム・ムダがワッハーブ派の流れをくむという認識が示されている。『カラム』はカウム・ムダに近い改革思想を持つと考えられる。コーランに基づくファトワを規範とすると述べることで、ワッハーブ派を正統的なイスラムの系譜に位置づけようとしていると考えられる。

ファトワにみられるイスラムの正統性は、コーランやハディースにくわえて、ムハンマドおよび中東における歴代のウラマーに見いだされていた。「千一

問]では、参照するファトワを通じて、自らの思想の正統性を訴えていたことがわかる。

くわえて、「千一間」においては、同時代の中東で出されたファトワが引用されるケースもあった。

Q.7 (021-09)

コカ・コーラとペプシ・コーラにはアルコールあるいは人を酔わす材料が混ざっているという噂ですが、これは本当ですか。

A.7

コカ・コーラやペプシ・コーラがとても人気なエジプトにおいても、この問題は物議をかもしているようである。なかにはこの二つの飲料が豚の成分や酔わす液体が混ざっていると言うものもあり、この二つを禁止するウラマーたちまで出てくるに至っている。こうした事情により、アズハル学院ファトワ評議会に次から次へと質問が寄せられた。それにより、アズハル学院は次のようなファトワを出した。

「アズハル学院のファトワ委員会には、ペプシ・コーラとコカ・コーラに関する多くの質問が寄せられた。彼ら質問者が言うには、既にこれらを禁止するファトワも出ていると主張する。なぜなら、ペプシ・コーラには豚から抽出したエキスが含まれており、一方コカ・コーラには人を酔わす成分が混ざっているからだという。

これらの飲料の原材料に関する「保健省当局」の調査結果、すなわち当局による製造工場の検査結果を吟味してから、同委員会はファトワを出すという判断を下した。その後、委員長が保健省の調査結果を受け取った。『製造工場を調査した当局がコカ・コーラとペプシ・コーラの液体を分析したところ、これら二つの飲料は人を酔わす液体あるいはアルコール、または豚から抽出した「ペプシン」を含有しておらず、また、人々の健康を損なう材料も含まれていないという結果を得るに至った』。(中略)

「こうした解説を受けて、委員会はコカ・コーラとペプシ・コーラは禁止ではないと判断した」(アルファトワ委員会委員長ムハンマド・アブドゥル・ファッタ・アルアナニ、エジプト、イスラム暦1370年12月21日/西暦1951年12月23日)。

上記の解説で質問者、そして読者が満足できたことと思う。 [Qalam 1952.4: 18]

コーラがハラールかどうかという質問に関して、エジプトのアズハル学院のファトワ評議会が出した声明が引用されている。東南アジアからエジプトに留学

するムスリムも多かったことから、アズハル学院のような著名な組織から出されるファトワは関心を持たれていたことがうかがえる。

Q.8

エジプトのムフティが出したファトワに関する最近の新聞報道を読み、私は失望しました。その内容は、女性の顔はアウラではなく、風上地方の女性がよく被っているベールは、単に貴族の人々が被り始めた装飾に過ぎない、というものでした。そのファトワは確かに正しいのですが、私が失望したのは、まるでイスラム教徒がその法を初めて知ったかのように大々的に新聞がそれを報じたことです。この事柄は既に使徒ムハンマドによって、彼が生きていた時に説明がなされています。古くから知られているこの事実が、どんな理由で新たな事実として、あるいは故意にそのように全世界に報じられたのか、ご説明下さい。

A.8

これに関してあなたは驚く必要はない。これは恐らく非イスラム教徒、あるいはそのような祖父母の慣習が宗教上の命令だと考えた狭い見識の人々によって質問が投げかけられたのだろう。大々的にそのファトワについて報じたのは外国の新聞社であり、新たなファトワが出された、つまり、以前は禁止であったのが合法化された、まるでウラマーがイスラム法の改正をできるかのように思ったのである。女性のアウラに関する法については、コーランやハディースの中で説明されている。(後略) [Qalam 1954.1: 5]

ここでは、エジプトのムフティが出した女性の服装およびアウラ（露出してはいけない部分）に関するファトワについて、媒体名は明らかではないが、外国の新聞社の報道がマラヤにまで届き、『カラム』でとりあげられたことがうかがえる。

ファトワの正統性は、ムハンマドから連なる中東のウラマーの系譜に求められた。そして、同時代の中東、特にエジプトのファトワは東南アジアでも参照されていた。ファトワは、時間と空間を越えた影響力を持っていた。『カラム』は、国境をまたいだ言論空間のなかにあり、イスラム世界のファトワを共有しつつ、議論していたのである。

3. マラヤの宗教行政とファトワ

本節では、マラヤにおいてファトワに関する問答

を取り上げる。マラヤの行政・政治におけるファトワをめぐる論争について、『カラム』はどのような立場に立ったのであろうか。

Q.9

以下のような3つの宗教局が出した公式のファトワのうち、どれに従ったらいいでしょうか。トレンガヌ州政府の宗教局の発表によると、ザカートとして払う稲の量は375ガンタンです(トレンガヌ州政府の秤量基準)。一方、クランタンの宗教評議会の承認のもと、クランタン州が出版した本(題名はイスラム法学教本)の中では400ガンタンとなっています(クランタン州政府の秤量基準)。そしてマレー語のラジオ放送の中で、スランゴール州のイスラム宗教局はその量を480ガンタンと定めたことと報じられています。

A.9

上記の宗教局がそれぞれそのような発表をしたならば、それはそれぞれに従われるべきである。この事柄は、関心が払われるべきである。なぜなら、ここマラヤのイスラム教徒の社会福祉にとって非常に重要なイスラムの五行の一つに関する事だからだ。

[*Qalam* 1953.10: 36]。

質問では、マラヤ連邦を構成する3つの州の宗教局や宗教評議会が発表した義務的なザカートの額がそれぞれ異なっていたことが指摘される。それに対する回答では、それぞれの州の基準に従うべきと回答している。回答者は、マラヤの州という行政区画に応じて宗教当局が権限を有するという近代国家の宗教行政体制を認めていることがわかる。

Q.10

近頃シンガポールの首席カディにより、産児制限に関する「ファトワ」が出されました。すなわち、まだ四ヶ月に満たない子宮内の胎児を中絶することは許されるという回答が出されたのです。そのファトワが出されると、イスラム教のウラマーらによる反論が起きました。私は一般庶民であるため、その論拠が正しいのかどうか分かりません。よって、イスラム教で定められた法に則ってこの事項を順守できるように、イスラム教ではどのようにして何らかの裁定を下すのか、あるいは法的判断を下すのかを説明して頂ければ幸いです。

A.10

実のところ、何らかの法的判断を下すことに関し

て、ウラマーらの間に見解の相違がしばしば生じている。それは法が存在しないために引き起こるわけではなく、大抵は裁定を下す何らかの問題に対する調査不足が原因となっている。(中略)

このようなことに基づき、何らかの物事に対して法的判断を下す前に、まずは専門家に説明を請うべきである。なぜなら、イスラム法学、ハディース、そしてタフシールの学者らは、往々にして保健に関する事柄について詳しく知らない場合があるからだ。また、保健に関する問題は、その専門家だけのものではないのだ。このことは以下のアッラーの啓示と結びついている。「汝らが知らぬことについては、専門家に(何らかを)尋ねなさい」。

何らかの法的判断を誤るいくつかの原因はしばしばここにある。なぜなら、状況は一つであるが、その中に異なる要因が存在する場合が往々にしてあり、それに対する法もそれぞれ異なってくるからだ。ゆえに、ウラマーあるいはウラマー評議会、または諮問評議会にとって、ある問題に関して宗教法に関する知識が豊富なウラマーと、医学者、経済学者、そして法学者といった知識人が互いに協力することが知恵となっているのである。人々が問題を起こした場合、それを上述の学者らが分析し、それをタフシールやハディース、そしてイスラム法学の分野を熟知した専門家であるイスラム教のウラマーらが議論するためである。

討論の対象となっている産児制限については議論が非常に多く出ているので、ここではこの事項に対し、どのような方法を以て法的判断が下されるのかを説明する方がいいだろう。

[*Qalam* 1955.7: 5, 36-38]

質問者は、シンガポールにおける産児制限政策をめぐり、中絶の是非に関してカディ(イスラム裁判所の裁判官)のファトワと一部のウラマーの見解との間に対立が生じていると訴えている。それに対して回答者は、明示されていないものの、首席カディによるファトワを批判し、ウラマーらは医学の専門家と協働して見解を検討すべきと主張している。イスラム法学の立場のみならず、非宗教的な学問分野の知見を取り入れてファトワを出すべきという主張には、近代主義的な思想があらわれているといえよう。

Q.11 (062-02)

8月に発行された号の中で、戦闘に関する記事において引用されたコーランの節の一部によると、アッ

ラーはイスラム教徒以外を指導者に選ぶことを禁じられた、と解説されているのを私は見つけました。同様に、コーランの節と法の原理に基づいた説明のもと、イスラム政党だけを選ぶことを義務付けるウラマーのファトワを私は読みました。したがって、これからインドネシアで行われる総選挙とマラヤで去る7月27日に行われた総選挙は、イスラム教の観点から法的にどうなるのかについて、説明して頂けることを大いに望みます。両者は異なりますか、あるいは同じですか。

インドネシアはイスラム教徒の国家であり、マラヤもまたイスラム教徒の国家です。ゆえにもし法的に同じと判断されるとしたら、私は1955年7月25日付けの『ウトゥサン・ムラユ』の新聞記事に戸惑いを感じます。その中でムフティ・アブドゥッラーは、ムスリムがムスリムを選出することは独立の達成を阻むとするファトワに「騙された」と述べ、挙句の果てに彼は「禁止ではない」と述べています。もしUMNOと連盟をくんだ非ムスリム候補者を選んだとしても、それは「禁止とはならない」ということです。それどころか、マレー半島の独立を達成するために時勢的また政治的に要求された道だということです。

ムフティ・アブドゥッラーの法的判断は、『カラム』誌の中で説明されている法的判断と相反するようで、特に12名のキヤイが署名した法的判断がそうです。

至高なる神の真の法はどうなっているのか、多くの人が満足のいく説明をして頂けることを願います。

A.11

その論拠となったコーランの節の目的は明白かつ明瞭であり、曲解することは許されない。それはインドネシアあるいはマラヤのイスラム教徒だけに向けられたものではなく、全てのイスラム信徒に向けられたものである。どこにしようとアッラーの掟を遵守し、その神の法が実施されるよう努力することがイスラム教徒にとっての義務である。こうした理由から、イスラム教徒だけから成る組織の中から代表を選ぶことが、各々のイスラム教徒にとって義務となっている。なぜなら、以前の号で掲載したコーランの節にあるように、イスラム教では、イスラム信徒が指導者として異教徒を選ぶことははっきりと禁止されているからだ。

非イスラム教徒を選ぶことを容認する考えの人々は、おそらく次のような意見を持っているのであろう。すなわち、彼らは西欧の人々の用語に従って宗教を意味付けているのだ。つまり、宗教は国家の統治とは無関係であり、それはイバーダートに限定され、それ以外にはない、という考えである。このような見解は

全くの誤りである。イスラム教を日々の生活規律及び国家規律から完全に切り離すことは不可能である。イスラム教を国家の政治と完全に切り離すことは許されず、ゆえに自分たちがいる国において神の法を実施することを、イスラム教徒には求められているのだ。

ペナン島のムフティであるハジ・アブドゥッラー・ファーヒムが前述のファトワを否定する際に述べたように、独立を達成するために明白なる神の命令や警告に対する違反を容認することを許す文言があるという根拠を、我々はコーランあるいは使徒ムハンマドのスナナのなかにひとつも見つけたことがない。もし根拠があるならば、彼にそれを提示するよう勧めたい。さらに、それを許す彼のファトワは、彼を取り巻く状況との関係性から生じた圧力により出されたのではないかと我々は考える。もし我々のこの推測が正しいとすれば、明白な神の御言葉の尊厳を変わず守るために立ち上がるよう、アッラーが彼に援助と御導きを与え給わんことを願う。

[*Qalam* 1955.9: 27-28]

この質問では、1955年に行われたマラヤ、インドネシアの総選挙において、イスラム政党に投票することが義務づけられているのが問われた。マレー語新聞『ウトゥサン・ムラユ』にペナンのムフティが出したコメントは、おそらく連盟党(マレー人政党のUMNOのみならず非ムスリムの華人、インド人政党の候補者を含む)に投票することを肯定するものであったと思われる。ここでは、『カラム』の見解とペナンのムフティの見解がはっきりと対立しており、政治的な圧力の結果ではないかと幾分表現は和らげているが、ペナンのムフティのファトワを批判する内容となっている。

Q.12

私は新聞でペラ州の宗教局が次のようなファトワを出しことを読みました。戦死した治安部隊(郷土防衛隊を含む)の各イスラム教徒は殉教したと見なされ、沐浴を施し礼拝を捧げる義務はない、というものです。このファトワに対し数人のウラマーらが異議を唱えました。そこで私はこの事柄について説明をお願いしたいと思います。願わくはこの一般的ファトワの内容から、後々生じる曖昧性も同時に回避できるように。

A.12

我々が新聞で読んだ限り、ペラ州の宗教局は殉教を三つに分類している。それは、現世と来世の殉教、現世

の殉教、そして来世の殉教である。なされた説明の中で、郷土防衛隊を含む治安部隊員は現世における殉教者に含まれ、ゆえに沐浴と礼拝を行う義務はないと述べているに過ぎない。

新聞において報道された解説の中には根拠が示されておらず、カルキュービーの著書や『トゥファ』などのシャーフィイー学派の法学書にそのように記されている、と述べているだけである。果たしてそのファトワの証拠となる文言は何なのか、その状態を承認した当局によって明示されていない。つまり、現在起きている状況と過去の出来事との合致について明示されていないのである。また彼らを殺したテロリストたちは異教徒または背教者なのか、あるいは現在行政を行っている統治体制に対する理解の相違が原因となり、ジャングルの中で戦わざるを得ないイスラム教徒なのかという説明がなされていない。(後略)

[*Qalam* 1956.2: 41-43]

質問では、非常事態下のマラヤにおいて、ゲリラとの戦闘で死亡したムスリムが殉教者とみなされるかどうかと問われた。回答者は、ペラ州の宗教局が出したファトワの根拠が示されていないという理由でこれを批判している。ゲリラのなかにもムスリムが含まれていたことにくわえて、戦死したムスリムは植民地政府のもとで組織された治安部隊で戦闘に加わったためである。ただし、批判の内容は、政治的な見解の相違ではなく、あくまで根拠が示されていないという手続き論であった。

Q.13

私はジョホール政府のムフティにいくつかの質問を送りましたが、それに対する回答は、単に「正しくない」、「許されない」などといった単語を並べているだけで、回答の中には質問に関する説明が少しもありませんでした。私はバンドンのアルウスタズ・ハサン・ビン・アフマドの著書『一問一答』に関して、その著書の中である問題に関するコーランやハディースの文言を根拠とした説明を沢山読み、その中に私がジョホール政府の宗教学校で学んだ内容と異なる説明を多く見つけたことについて質問しました。私の得た回答において、彼はカーディヤニー派について注意を促しつつ、彼らのなかには、民衆をシャーフィイー派から離れさせ、カーディヤニー派に属させることを狙い、宗教上のイジュティハードを行って、民衆に見解の相違をもたらすと明言する人もいる、と述べまし

た。『一問一答』に関して、彼はその本を読んでおり、彼の見解では、本の中には間違い、嘘、そして無知が満ちていると述べました。

A.13

あなたの質問に対する回答では、その事項が正しいか否かを判断するための説明がなされていないということが、あなたが我々に同封してくれた添付文書の中で分かった。ゆえに、通例ではそれを受け入れるかどうかはあなた次第だが、我々の見解では、それに関する説明もないままだ単語だけ、正しくない、許されないなどといった言葉だけの回答を以て出されたファトワではなく、可能な限りの説明を加えた回答をすることが極めて望ましいと考える。あなたの質問に対するジョホールのムフティによる説明では(同封された添付文書によると)、「本の中には間違い、嘘、そして無知が満ちている」という。あなた自身『一問一答』を詳しく読んだ上で、あなたはこのファトワを信じるのだろうか。それはあなた次第だが、我々の見解では、それが絶対的なものとなり、人々が盲目的に従い、それを一般化することがないよう、ムフティはどこが誤りなのか指摘すべきである。なぜなら、この問題における意見交換はきちんと管理されるべきだからだ。(中略)我々がそれを受け入れるには、ファトワの中に何らかの説明が伴わなければならない。ファトワが出される場合は、説明を伴うことが望ましい。根拠がないまま、まさに正しい、許されるなどといった言葉を用いるだけではいけない。 [*Qalam* 1957.9: 40]

ここでは、ファトワについて読者が質問したところ、ジョホール州のムフティからの回答が抽象的であったことに対して批判がなされている。質問者は、おそらくアフマディーヤ²⁾の影響にある書籍を参考に、シャーフィイー派の見解との対立について指摘した。回答者は、その点には触れずに、ムフティはファトワおよび回答の根拠を示すべきであると強調した。

Q.14

拝啓、ジョホール州のムフティであるサイエド・アルウィ・ビン・タヒル・アル＝ハダッドのファトワが出た結果、社会福祉くじの収益金から数多くのモスクが建設されました。建設費の全てがその資金から出さ

2) 19世紀末にインドで創始されたイスラム改革運動の教団。創始者ミルザ・グラム・アフマドはパンジャープ州のカーディヤーンに拠点を置いた。のちにカーディヤーン派とラホール派に分裂する。創始者が自らを救世主と規定するなど、異色の教義を持ったため、他のムスリムからは異端視されることもあった[大塚など編 2002:55]。

れた場合も、またはその一部が出された場合もあります。もしその資金がハラムだとすれば、そのモスクの状況はどうなりますか。礼拝所とすることが許されるのか、あるいはただ破壊されるべきなのでしょう。

A.14

我が国には、もう十分多数のモスクがある。それにもかかわらず、イスラム教徒によりモスクを建てる活動が未だ盛んに行われている。寄付を求めることが困難になると、また所有権が切れたなどの根拠によりハラムであると合意された宝くじの収益金がハラムとなり得るというファトワが出された結果、それぞれの村にモスクを建設するため、社会福祉くじ委員会に対し資金を要請する動きが起こった。資金不足の場合もあれば、より多くを求めての場合もあった。こうした状況は、ハラムとされる資金が含まれた費用で建てられたモスクで礼拝を行うことを一部の人が嫌ったため、村々で対立を引き起こした。この人びとは、所有権が切れている場合の宝くじから徴収した資金の使用は許されるとして、宝くじが意図的に行われていることは明らかであると考えているが、現行の宝くじは継続的に行われている。

[*Qalam* 1960.9: 33-37]。

この質問においても、宝くじの収益によりモスクを建設することの是非について、宝くじの収益金がハラムであるとしたジョホール州のムフティによるファトワを回答者は批判している。

マラヤで出されたファトワをめぐって、法解釈の対立が起こることもあり、『カラム』がそこに意見する例はしばしばみられた。州の宗教局や、州が任命権を持つムフティ、カディが発したファトワは、公的な意味を持っており、『カラム』はそうした宗教行政の枠組みを基本的には受け入れていたが、とくに政治的な色彩の強い論争においては、その見解を批判することもあった。ただし、批判は内容よりも、あくまでも法的根拠の有無であった。

おわりに

本論では、コラム「千一問」に登場するファトワをめぐる問答を分析し、彼らのファトワに関する見解を検討した。暫定的な結論は以下の通りである。

第一に、ファトワとして認識される法的判断の出し手は、ムハンマドや教友、四大法学派のウラマー、同時代の中東のウラマー、そしてマラヤの宗教行政

の役職者など、多岐にわたった。同時代のウラマーらが出したファトワは特に論争の的となっており、「千一問」のなかでも頻繁に取り上げられた。『カラム』は、ウラマーが出すファトワの権威を認めつつも、様々な形で論争に加わった。

第二に、ファトワの正統性は、コーランとハディースなどを法源としたイスラム法学にもとづくという点は共通理解が成り立っていた。法学の権威は時代や地域を越えて認められており、同時代の問題に関して、ムハンマドや法学派など、歴史上の権威に基づくファトワはしばしば引用された。同時代の中東で出されたファトワが参照されることもあった。『カラム』は、イジュティハードを重視する点で改革主義的な思想を持っていたが、ウラマーや彼らの出すファトワの正統性を否定することはなかった。

第三に、「千一問」で言及されたファトワのうち、マラヤで出されたものは、ほとんどが州のムフティなど、公的な役職者によるものであった。マラヤの文脈において、州などの行政区画を単位としてムフティなどの役職者が置かれ、そこから出されるファトワが公的な権威を持つという宗教行政の体制は概ね認められていた。ただし、『カラム』がそうした公的なファトワを公然と批判し、法源をめぐって誤りと断じることもあった。読者からの質問や意見に応える「千一問」は、イスラムの正統性をめぐる議論の場となったのである。

『カラム』には、「千一問」のほかにも、同時代に出されたファトワについての記事がみられる。そうした記事もあわせて分析することで、イスラムの正統性をめぐる論争のあり方がより明確になっていくと思われる。

参考文献

- 大塚和夫など編 2002 『岩波 イスラーム辞典』岩波書店。
塩崎悠輝 2016 『国家と対峙するイスラーム——マレーシアにおけるイスラーム法学の展開』作品社。
坪井祐司・山本博之編 2016 『『カラム』の時代Ⅷ——コラム「千一問」にみるマレー・ムスリムの宗教実践』京都大学地域研究統合情報センター。